

社長所感（6月）

今年は、梅雨入りが早いようです。

この時期になりますと、初代のお天気博士の倉嶋さんから聞いた話を思い出します。

長嶋、王が活躍していた昭和30年代後半、ドーム球場が未だわが国に存在しなかった頃広島球場でナイターの日程が組まれていました。

昼過ぎ、球場で弁当を販売している仕出し屋さんから、広島气象台に電話が入ります。

夜の天気の間い合わせで、气象台から「雨は降らない」との回答を得て、大量の弁当の仕込みに取り掛かります。

午後5時過ぎに出来上がり、球場に運び込もうとした矢先に激しい雨が降り出し、試合は中止になってしまい、大量に作った弁当は全くの無駄になってしまいました。

その3日後、広島气象台の玄関に、件の仕出し屋から大量の弁当が届けられました。

气象台の職員が、弁当を開けてみますと、3日前のもので、既に腐っていました。

驚いた職員が、仕出し屋に電話しますと

「日頃、天気予報で气象台の皆さんにお世話になっているので、心ばかりの差し入れです。どうぞ、皆さんで召し上がってください。」と、とぼけた返事。そこで、

「こんな腐った弁当を食べたら、当たるじゃないですか。」と气象台の職員が気色ばむと、「大丈夫です。みなさんは气象台の方だから、絶対に当たりません。」と答えたという。笑うに笑えない実話だそうです。

（現在、こんなことをすると、単なるユーモアで済まずに、威力業務妨害罪などに問われるおそれがあります。）

当時、天気予報は当たらないことの代名詞のようなもので、山陰のある地方では、フグ刺し、フグちりなどを食べる際に、「天気予報、天気予報」と唱えてから食べるという風習がありました。そうすると、フグの毒に「当たらない」という信仰からだそうです。

当時でも、天気予報の的中率は7割5分を超えており、数字的には当たる確率の方が高いのですが、当たらなかった時の方が印象に強く残るため、「天気予報イコール当たらない」というイメージが刷り込まれていたようです。

この点、的中率を上げるために、日夜努力されている気象庁の職員の方には、気の毒な話ではあります。

気象庁の職員から作家になった新田次郎さんに、「赤毛の司天台」という短編小説があります。江戸時代の将軍の鷹狩りや大奥の花見など大切なイベントの際に、決まって外れる天気予報をテーマにしたもので、江戸時代の話とはいえ、天気予報担当者の苦労や悲哀が伺える内容となっています。

現在は、職員の方の努力に加え、気象衛星の打ち上げや気象情報の国際的共有などにより、予報の精度は上がってきていますので、より正確な天気予報に基づき、梅雨の時期を快適に過ごしたいものと願っています。